



大決壊

潮風のメモリー



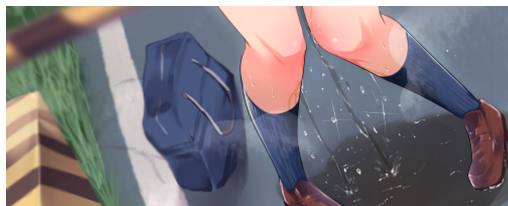
1 章目

海で。茶色く染まる白ビキニ P5



2 章目

踏切でおもらしっ！ P42



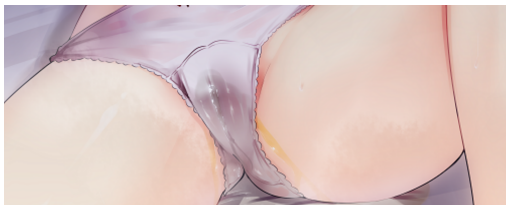
🌴 3 章目

ブルマでうんちおもらしっ！ P69



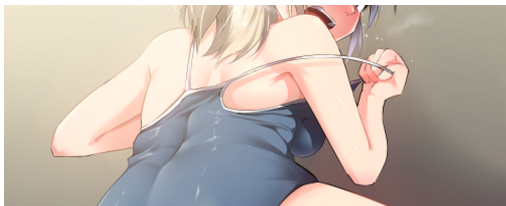
🌴 4 章目

おねしょっ！ P94



🌿 5 章目

スクール水着でうんちおもらし！ P118



🌿 6 章目

砂浜でのおもらしごっこ！ P164



むふふ(既刊紹介)

🌿 1 章目 海で。茶色く染まる白ビキニ

「日焼け止め、よし！
準備体操、よし！」

宇宙にまで抜けているかのような、
まっさらな青空。

その青に染め上げられた、どこまでも
続いている青海。

真っ白に焼けた砂浜に立った少女は、
額に浮かぶ汗を一拭いすると、水平線に
煙る無人島へと目を細める。

明るい金髪をポニーテールにした、見
るからに活発そうな少女。

水平線を見やる双眸は珊瑚礁の海を映
したかのような碧眼で、肌は陶器のよう
に真っ白。

そんな若さにはち切れそうな身体を、
純白のビキニに包み、少女は大きく背伸
びをしてみせる。

「夏休み、今日で最後だもんね。たくさん泳がないとっ」

少女の名前を、^{みなせきようか}水瀬鏡花、という。

この海の街に住む祖母が英国系の血を受け継いでいるので、一見すると外国人のように見えるけど、れっきとした日本生まれの日本人。

それでもそのプロポーションは、同い年の少女と比べるとむちっと成長していた。

「今日は泳ぐぞ……！」

時はまだ午前中。

夏休みの最終日、鏡花はたくさん泳ごうと家からビキニ姿のまま飛び出してきたのだった。

こんなことができるのも、父がこの海岸線で自宅兼フレンチレストランを営んでいるからこそだった。

「ン、ひゃっこい……」

打ち寄せては返す波に踏み込んで、今日の水温を確認。

うん。

今日もたくさん泳げそうな気がする。

「まずは向かいの無人島まで、ゴー！」

鏡花は小さく、しかし力強く呟くと、大海へとクロールで掻き分けていくのだった。



「ふう……まずはウォーミングアップ、できた、かな？」

海岸から500メートルほど離れたところにある、小さな無人島まで泳いだ鏡花は、ふう、大きなため息をつく。

この無人島……通称・亀岩は、その名の通り亀のような形をしているからそういうふうに呼ばれている。

本当はもっとちゃんとした名前がついていたはずだけど、地元に住んでいる人はみんな亀岩と呼んでいる……そんな場所だ。

その誰もいない亀島の砂浜で、鏡花ははしたなくごろんと大の字に横になる。誰もいない無人島だからこそできるポーズだ。

真っ白なビキニを着ているから、下着姿で横になっているかのような開放感を味わうことができる。

「はぁ……。今日で、夏休みも終わりがぁ……」

碧眼に映し出されるのは、明暗がはっきりとした夏の雲。

午後になったら大きな入道雲に成長して、一雨くるかもしれない。

明日から学校がはじまって、テストもあると考えると憂鬱な気持ちになってしまう。

それでも海で泳いでいるときだけは、無心になっていられる。

水を搔けば、その分だけ前に進んでいるという実感が得られるし。

「日焼け止め、よし」

鏡花は砂浜で寝そべったまま、両腕を確認。

日焼け止めのクリームを入念に塗ってきたからバッチリだ。

こんがり小麦色に日焼けできるならいいけど、鏡花は日焼けすると赤くなって水ぶくれになってしまう体質だから、特に気をつけることにしていた。

「よーし、もっと泳ぐぞお……！」

一休みが済んだ鏡花は身体を起こすと、再び大海へと泳ぎ出ていく。

学校がはじまれば、朝から夕方まで泳ぐことができなくなる。

この夏で思いっきり泳げるのは、今日で最後なのだ。

鏡花は、夏を惜しむかのように、海を掻き分け進んでいく。



鏡花は有り余る体力にもものをいわせて、海岸線沿いの無人島から無人島へと渡り鳥のように泳いでは休み、気がつけばお昼の時間になろうかとしていた。

この頃になるとさすがにお腹が減ってくるので、父が経営しているフレンチレストランを手伝いつつまかない料理を食べて、再び海へと泳ぎ出ていく。

「腹ごしらえ、よし！」

父がまかないで作ってくれた海鮮焼きそばフレンチスペシャルでお腹を満たした鏡花は、再び真っ白な砂浜へと戻ってきていた。

午後的大海はどこまでも青くて、深い。

鏡花は腹ごなしといわんばかりにク
ロールで海へと泳いでいき――、

(誰も、いないよね……?)

足が着くか着かないところにまでやっ
てくると、キョロキョロとあたりを一瞥
する。

大丈夫。

周りには誰もいない。

遠くの方にセーリングの小さな帆が見
えるくらいだ。

(ここなら平気……だよね)

鏡花はかすかに頬を弛緩させる。

その直後だった。

じゅわわ……。

純白のビキニに包まれている、股間が
生温かくなったのは。

それは鏡花の誰にも言えない秘密だっ
た。

——海で、水着をきたままでおしっこをすると、気持ちいい。

「あっ、あぁぁ……」

じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ……。

おまたが生温かくなると、尿意を解放した快感に溶けそうな感覚になる。その感触が、鏡花は大好きだった。

「おまた、あったかい……」

じゅもももももももももも……。

恥ずかしいおしっこの音も、水中ならば鳴ることがない。そのぶんだけ思いっきりおしっこをすることができる。

お魚だってみんな海でしているのだ。これくらい、当然のことなのだ。なにも恥ずかしがることはない。

「ン……ッ」

もわわっ。

最後の一飛沫を噴射すると、鏡花のおしっこはすべてが無音のうちに終わった。

おまたのところが生温かい感じがするけど、すぐに水の流れが隠してくれることだろう。

「よし、泳ごう！」

鏡花は微かに頬を赤く染め、再び泳ぎはじめる。

まだ太陽は昇り詰めたばかり。

まだまだ時間はあるけど、今日という日は二度とこないのだ。



「ふう……さすがに泳ぎ疲れた、かな……！」

鏡花が無人島の砂浜に大の字で寝転んだのは、もうそろそろ日差しが黄金色になろうかというころだった。

疲れたけど、そのぶんだけ充実感がある。

明日から学校が始まるから、今日みたいに心置きなく一日中泳ぐことは、もうできないだろう。

「あー、明日から学校かぁ！」

青空に向かって叫んでみるけど、その声も潮騒にかき消されて誰にも聞かれることもない。

この瞬間、鏡花は束の間の自由を満喫しているのかもしれない。

「帰ったら、明日の学校の準備して……はぁ」

夏休みの宿題はもう片付けたから心配は無いけど、それにしても憂鬱な気分になってしまう。

このまま水平線の向こうまで泳ぎ続ければ、もしかしたら学校に行かなくてもいい世界に辿り着けるのでは？

そんなことを考えてしまうほどに。

「あー！ 学校に行きたくなーい！」

大声で叫んでも、ここは無入島だからセーフ。

ここぞとばかりに鏡花は憂鬱な気分を吐露する。

たしか、去年の夏も……さらに言えば、夏休み最終日も同じことをしていた。

砂浜で大の字になって、ジタバタしたものだ。

だが。

去年とは違うことが、たった一つだけあった。

それは。

「うっ、この感覚は……！」

ぎゅるるるっ。

ビキニを着て剥き出しになっているお腹から響き渡る、あまりにも無慈悲な不協和音。

この感覚は……間違いない。

お昼に食べたものが消化されて、腸が蠕動運動をはじめたものだった。

「そんな……っ、お腹、冷やさないようにしてたのに……！」

鏡花は、お腹が緩いほうだったから冷たいものには気をつけるようにしていた。

お昼を食べたときも、水には氷を入れないくらい注意していたというのに。

だけどさすが朝から海で泳ぐようなことをすると、運動をしているとはいえお腹を冷やしてしまうらしい。

「こ、これは……ピンチかもしれない……！」

ギョルルル……ごぼっ！

くびれたお腹から聞こえてくるのは、腸がのたうち回っているかのような不吉な音。

ドッと冷や汗が噴き出してきて、お腹の具合はジェットコースターのように下り坂へと突入していた。

「お腹痛い、痛い、痛い……っ」

きゅるる……ゴポッ、ゴポポ……ッ。

急に痛み始めたお腹に両手をあてて、小動物のように身体を丸める。

それでもいっこうに腹痛が引いてくれる気配はなかった。

むしろ、痛みは強くなっている。

「ト、トイレが……ないっ」

タイミングが悪いことに、ここは無人島だ。

トイレなんて文明の利器などどこにもない。

手頃な岩陰はあるし、誰もいないからそのへんでしてもバレはしないだろう。

だけど、それは鏡花のJKとしてのプライドが許さなかった。

「落ち着け……、落ち着くんだ……俺のお腹のスネーク……！　ここはまだ先走る場所じゃない……！」

ぎゅるる～～～。

ごぼっ、ごぼっ。

冷や汗を流しながら、脳内で一番近くにあるトイレを検索。

海岸線までは最低でも約500メートル泳がなくてははいけない。

なんとかその距離を泳ぎ切ったとして、最短のトイレは砂浜にある仮設トイレだ。

だけどその仮設トイレはいつも行列ができています。

となると、ここは安全策をとって、レストラン兼自宅のトイレに駆け込むのがベターなのだろう。

「い、いけそう……？ スネーク、収まってくれた？」

スネークがツイストダンスを踊っているかのような腹痛は、いつの間にか消えていた。

だけどまだ油断はできない。
腹痛には第二波、第三波があるのだ。
我慢すればするほど痛みが強くなっていき、波も大きなものになっていく。

「まだ、まだだ……ビッグウェーブはまだ来てない……！」

そう思って、砂浜から立ち上がろうとした、その時だった。

ぷりゅりゅっ。

「アッー！」

熱いお湯状のものを漏らしてしまい、鏡花はソプラノの悲鳴を上げてしまった。

その悲鳴は青空にエコーして響き渡ったが……いまの鏡花にはそのことを気にしている余裕など残されてはいなかった。

なにしろ、お尻の割れ目に熱いものを感じていたのだから。

「ちょっ！　これは思っていたよりもピンチだぜ……！　あつついのがお尻から……！　おう!?」

ぷりゅりゅっ！

肛門のすぐそこにまで柔らかく熱いものが押し寄せてきて、割れ目から溢れ出してくる感触。

鏡花の引き締まったお尻の筋肉でも止められないほどの『液体』が、噴火しようとしていた。

「ま、まだ……だめえ……っ」

鏡花は背筋をピンと伸ばして、つま先立ちになって括約筋に力を籠めながらも、海へと踏み込んでいく。

そんな鏡花のまとっている純白のビキニ……そのお尻の部分には、早くも黄土色の染みができあがりつつあった。

(外で……しちゃう……!?)

と、ほんの一瞬だけ甘く熱い誘惑が脳裏をよぎる。

だけど、おしっこならともかく、うんちを外でするなんてこと、恥ずかしくてできるはずがなかった。

万が一誰かに見られでもしたら……それに、観光地でもあるこの砂浜では、どこにカメラのレンズがあるかわからないのだ。

野糞などという下品な行為ができるはずがない。

「家まで……保ってくれ……いや、保ってくれないと……。ひっ、ひうう！」

少しずつ海へと踏み込んでいく。
ただどいまに限っていえば、海水が妙に冷たく感じられた。

ただでさえ冷え切っているお腹が更に冷やされていき、

ごぼっ、ごぼぼっ！
ぶじゅりっ！

肩まで浸かった瞬間に、ビキニに誤魔化しようのない量を漏らしてしまった。

「あっぐううっ」

ビチビチビチッ！
ブボッ！　　ビチチチチ！

一度緩んだ直腸は、そうそう簡単には閉じてくれない。
ただでさえお湯状の下痢だ。

どんなにお尻に力を入れても、腸にかかる内圧のほうが高くなっていた。

「おっ、おっ、おおおっ、お尻が……爆発、しちゃ、ううう！」

ビチチ！

ブババッ！　ぶふおっ！

液状弁に混じって気体までも溢れ出てきて、ボコンボコンと海水面が泡立つ。

もわわ……。

磯の香りに混じって、生卵を腐らせたかのような悪臭が漂う。

それは正しく鏡花の腸から排出されたガスの香りだ。

さらに言えばビキニのお尻に漏らしつつあるものの匂いだった。

「お、泳がないと……ううっ！」

ビチビチビチッ！

肩まで海水に浸かって、泳ぎだそうと思っても、その一歩目を、どうしても踏み出すことができなかった。

ここから先、泳ぎ出せば海岸線に辿り着くまでは足が着かないところを泳がなくてはならない。

それがいまの自分にできるだろうか？

「む、むりい……」

ぶりゅりゅりゅっ。

ミチミチミチミチ……！

万が一、足を吊ってしまったら？

この腹痛に耐えきれず、本格的におもらしを始めてしまったら？

逡巡しているあいだにも、お尻の割れ目からは灼熱のマグマが溢れ出してきていた。

「うそ……。泳げ、ない……？」

少しでも泳ごうとして水に浮けば、その拍子にビキニの中に下痢が溢れかえるに違いなかった。

それほどまでに鏡花のお腹の具合は急降下している。

「えっ、あっ、い、やっ……」

ぶりゅりゅりゅりゅっ。
ぶぼぼっ！　ぶぼぼっぼ！

純白のビキニに包まれている豊満なヒップラインが、爆音に一気に盛り上がっていく。

あたりに気泡が撒き散らされると、海風にたしかな腐敗臭が混じっていく。

「トイレ……むりい……っ」

その短い一言が、きっかけだった。
フッと鏡花のお尻から力が抜けると――、

ビチチチチチチチチチ！

ブフォッ！ ビチビチビチビチ！

ほぼお湯のような下痢が、純白のビキニを茶色く穢していく。

足口や、見えそうになっているお尻の割れ目の背中部分から茶色い液状便が溢れ出してくると、海水に混じって漂いだす。

「あっ、やっ、出ちゃ……いや……っ」

ビチビチビチ！

ブババッ！ ぼふっ！ ぼふふっ！

穢らわしい音とともに、鏡花の周囲に液状便が漂うのは一瞬のことだった。

この瞬間、鏡花は自らの下痢に塗れてしまったと言っても過言ではないほど大量に失便していた。

「お尻……熱いい……っ」

ブボボッ！　ぶふおっ！
ビチチッ！　ビチチッ！

マグマのように灼熱な感触が尻の割れ目から噴火して、もはや純白だったビキニは、もうそこにはない。

醜く茶色に膨らんだ布切れが、そこにはあった。

その布切れはヒップラインをうっすらと盛り上がらせていき、一回りも二回りも大きくなっていった。

「あっ！　あっ！　あっ！　あつついの
が……ううっ！」

ブリュリュ！　ミチミチミチ！
ぶっっ、ぶりぶりっ、ぶぼ！

パンパンに膨らみきったビキニのヒップラインでは抑えきれなくなった下痢が、会陰を伝って前のほうにまで押し寄せてくる感触。

「おま……っ、おまたにい……く、食い込んで……はううっ」

にゅるるるる！
びちっ！ びちちっ！

会陰を伝って前のほうに押し寄せてきた下痢は、容赦無く鏡花のクレヴァスに食い込んでくると、茶色く焼き尽くし、陵辱していく。

にゅるるるるるるる！
ビチビチビチビチ！ ブババババババ！

クレヴァスに食い込んできた下痢は、クリトリスを柔らかな感触で包み込んでいく。

その刺激に鏡花の直腸は弛緩と痙攣を繰り返し、下痢を噴出していくことになった。

「あっあああ……も、もう……ううっ」

ビチビチビチ！
にゅるるるるるるる！



そんな鏡花に、ある変化が顕れていた。

もう、ここまでおもらししてしまったのだから、我慢しても無駄じゃないか……。

心のどこかでそう考えてしまった鏡花は――、

「い、いやあああああ……っ」

ブババババババババ！

ぶりっ！　ぶりぶりぶりっ！

口では嫌がりながらも、自らの意思でお腹に力を入れて排泄していた。

ビキニの腰布が無様にも前のほうまで汚辱されていき、元の純白だったところが無くなっていく。

それほどまでに鏡花の周囲には、自らの失便が漂っていた。

「ううっ、おっぱいまで……茶色くなってるし……っ」

ビチビチビチ！

ぶぼぼ！ もわっ、もわわっ。

ビキニのおっぱいを包み込んでいる生地までも、鏡花の下痢によって茶色く染まろうとしていた。

出てくるのは、下痢だけではなかった。

お腹に力を入れたことにより、おしっこまでも勝手に漏れ出してきていた。女の子の尿道は、太く、短い――。

じゅもももももももももも……。

ぶりっ、ぶりぶりぶりっ！

ビキニの股間部分が、うっすらと黄ばんでいく。

それは鏡花が自らの意思で排泄しているという、恥ずかしすぎる証だった。

「ううっ、早く、終わってえ……っ」

にゅるるるる！　ぶぼぼ！
しゅいieiieiieiieiieiiei……。

ビキニの股布の前からも、足口からも、背中からも下痢が捻り出されてくる。

更には股間までも黄ばませて、周囲に下痢を漂わせながらも鏡花は失便を重ねていった。

「ううっ、お尻も……おまたも、熱い、よお……っ」

ぶぼぼっ！　ブババッ！　ボフッ！
ビチビチビチビチビチビチビチビチ！

自らの意思での排泄に、股布のなかかがパンパンに膨らんでいき、下痢にクリトリスが焼かれる。

いつしか聴覚が麻痺し、鏡花は激しい耳鳴りに襲われていた。

潮騒さえも聞こえなくなり、現実でおもらししていることが、どこか他人事のようにさえ思えてきてしまう。

「お尻熱い、熱い、熱い……ッ」

ビチチ！ にゆるルルル！
ぷりぷりぷり……！
しゅわわわわわわわわわわ……。

鏡花の周囲は、自らの放った下痢で泥沼のようになっていた。

それでも鏡花の排泄が終わってくれることはない。

その量たるや、自分でおもらししたことが信じられないほどのものだった。

「あうっ、おまたも……あつつい……よお……っ」

ジョボボボボボボボボボ……。
ぶふおっ、ぶふおふお！
ニュルルルルルルルルルル！

鏡花の排泄は、いつまでも終わることなく――

やっと鎮まってくれたのは、漏らし始めてから十五分が過ぎたころのことだった。



「はぁ……、はぁ……、はぁ……っ」

顔を真っ赤にさせて息んでいた鏡花は、ゆっくりとお腹から力を抜いていく。

どうやらお腹の調子は、元通りに落ち着いてくれたようだった。

だけどその代償は高くついた。

「こんなに漏らしちゃうなんて……」

もわっ、もわわっ……

胸まで海水に浸かっている鏡花の周囲に漂うのは、茶色く穢らわしい汚泥。

ところどころにシメジやトウモロコシが浮かんでいて、鏡花の羞恥心をさらに掻き立てようとしてくるようでもあった。

「うう～、酷すぎる……」

ただこのまま呆然としているわけにもいかない。

いつ、誰がここまで泳いでやってくるかわからないのだ。

それにこのまま股布を下痢でパンパンに膨らませて海から上がるわけにもいかなかった。

「綺麗に、しないと……」

まずは周りに誰もいないことを確認。
よし、誰もいない。

「脱いでも、平気、だよね……？」

呟き、鏡花は少しずつビキニの股布を降ろしていく。

下痢で火傷しそうなほど熱くなっていたおまたに、海水が流れ込んできて、妙に冷たく感じられる。

それでも右足、左足と抜いて脱ぐと……、

もわわ……っ。

股布のなかに溜まっていた下痢が海水に漂っていき、青が茶色に染まってい

は……、酷いものだった。

純白だったはずなのに茶色く染め上げられていて、おまたの方にまで広がっている。

白い部分を探すほうが難しいほどになっていた。

「ううっ、柔らかい……」

下痢を洗い落とすためには、直に下痢に触らなくてはならない。

漏らしたばかりの下痢は、まだ鏡花の体温を宿して熱く、柔らかかった。

せっかく整えた爪に下痢がはさまってしまうけど、いまはそんなことを気にしている場合じゃなかった。

「前のほうまでドロドロだよお……」

不幸中の幸いか、水中でおもらしをしたので酷い染みにはなっていないようだった。

海水で擦るように洗ってあげるとすぐに白くなってくれる。

「念入りに洗わないと……」

グチュ、グチュチュ……。
ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ。

念入りに海水で洗っていくと、数分後にはビキニは元の純白を取り戻してくれた。

あとは――。

「おまたとお尻も綺麗にしないと」

海中でおもらししたとはいえ、鏡花のお尻とおまたは下痢に塗れたままになっている。

海水に黽られている鏡花の美丘は、産毛さえも生えていないパイパンだった。剃っているわけではない。

生まれたときから思春期を迎えても、鏡花の股間はずっと不毛地帯のままだったのだ。

あまり直視したくないおまただけど、ビキニを穿く前に綺麗にしておかなければ。

そう思って、割れ目に指を入れて綺麗にしようと思い……そのときだった。

ぎゅるるるるっ。

「うっ」

再びお腹から聞こえる不協和音。
どうやらお腹にはまだ下痢が残っているらしい。

(どうしよう。しちゃう……?)

その逡巡は、ほんの一瞬だった。
もうあたりには下痢を撒き散らしてしまっているのだ。

いまさら我慢したところで、もうなにも意味がないことじゃないか……鏡花は、そう考えてしまっている。

「ふっ、ふうう……っ」

**ぶばっ、ぶばば！
ビチビチビチィ……！**

鏡花は顔を真っ赤にして息む。
直後には肛門から気泡が弾け、茶色い未消化物が海中へと放たれていた。

プリッとしたお尻の周囲を、下痢が漂っていった。

「はぁ……開、放、感……」

ようやくスッキリとしてくれたお腹に、鏡花は無意識のうちに呟いてしまう。

ビキニを脱いで、海中での自らの排泄は、なんともいえない開放感を鏡花にもたらしていた。

まるで魚になったかのような。

母なる海で、生命の一つになったかのような、そんな開放感。

「……って、なに考えてるんだ、あたし……！」

呟いてしまったことを否定するかのよう
に首を横に振ると、そそくさとビキニを穿く。

海水で洗ったビキニは、すっかり元通り綺麗な純白に戻ってくれていた。

「さて、泳ごっかな！」

下痢をおもらししてしまったけど、まだまだ時間はある。

今日は夏休み最後の日なのだ。
心配していた夕立もなかったのもので、
たっぷりと最後の海を堪能することができた。

体験版はここまでです。

次のページからは
既刊のCGを掲載しておきました。

楽しんでもらえたら嬉しいです。

むふふ

既刊紹介 各種 DL サイトで配信中！







大決壊！
秘密の日記♡





